

『「総合的な学習の時間」(仮称)』と地理学教育

田宮 兵衛

1. はじめに

『「総合的な学習の時間」(仮称)』というものが何であるかを、初等中等教育関係の情報に接することが少ない読者に紹介することが、本文の目的の1つである。地理学教育が何であるかは、分かったようで分からないであろう。すなわち、本文では地理教育と地理学教育を区別しているのである。地理教育は読者各人が常識に基づいて思い描く内容で差し支えない。そこで本文を始める前に、まず説明しておかなければならないのが地理学教育である。ここで、地理学教育という言葉で言い表そうとしているのは、大学の地理学科で行うべき教育を指す。この中には学部教育だけでなく大学院教育も含まれる。これらは明らかに地理教育の一部分ではあるが、地理担当教員・地理学研究者の養成を目的の一部に含むのでその点を区別するために地理学教育という語を本文では使用することにした。学会誌の編集委員をやっていると、大学院生の投稿論文に様々な示唆を与えて論文の体裁に整えようとする編集委員の努力たるや大変なものである。これが地理学教育1つの典型例であろう。

初等中等教育の教科として地理が存在する限り地理教育も存続する。しかし、時代の趨勢で、地理学科なる名称は一部の公立・私立大学をのぞき消滅したようである。また、大学入試センター試験で地理を選択するのは、旧社会科系の1科目の選択を要求される理系の学生が大部分であるという。初等中等教育の地理の教員の採用はほとんど無い。中学の社会科の場合、その大きな理由は、就学年齢人口の減少とそれにも拘わらず1学級の生徒数を適正規模に減らそうとしない教育政策である。高校の地理歴史科の場合は、もし募集

があったとしても必修である世界史の教員が優先的に採用されることがさらに加わる。これらは等閑視できることではなく、地理学教育の目的の大半がすでに失われて久しい。

かかる状況に置かれている地理学教育に大学において携わるものとして、何らかの行動を起こすことが迫られている。行動の可能性は、様々な局面で探るべきであろう。その一つとして、『「総合的な学習の時間」(仮称)』への対応が考えられるのではないか、これが本文執筆の動機である。

2. 『「総合的な学習の時間」(仮称)』に関心を示すに当たって

『「総合的な学習の時間」(仮称)』は、1997年11月15日教育課程審議会(1998)が公表した中間まとめでマスコミデビューを果たしたが、正式採用される段階でどのような名称を含めかなりの部分が未定である。これについて以下、中間まとめに基づいて説明する。テキストは教員養成セミナー3月号別冊(第20巻第9号)新・教育改革の全貌②『教科審』をよむ—教育の未来へ—』に掲載されている『教育課程の基準の改善の基本方向について(中間まとめ)』による。

しかし、その作業に移る前に一言述べておかなければならないことがある。すなわち、文部省を含めたこの種の作文に関わる人々が著す抽象的美麗辞句と修飾語の羅列により構成された文章にどれだけの表現力や伝達力があるかという疑問である。曰く『「ゆとり」の中で「生きる力」をはぐくむ』、『横断的・総合的な指導をより円滑に推進』、『よりよく課題を解決』等々、である。多義的なあるいは幅広い解釈が可能な修飾語の使用、さらにその連続的な使用は意味ある情報をほとんど

伝え得ないはずである。それにも拘わらずその種の修飾語を多用する目的は、語るべき内容の貧しさを粉飾するためであると思えない。定量的ではない修飾語の使用を極力避ける自然科学の作文に慣れた読者が「中間まとめ」を読めば、この感想に同意してもらえらるであろう。

前掲誌所載のインタビュー記事で佐高(1998)は、本中間まとめを含む教育改革議論を「干物の寝言」と表現している。このたとえで干物とは大学及び大学教授のことであり、文部省は干物の腐ったみたいなものということである。筆者の本音もこれに近いが、先に述べた地理学教育の現状から「溺れるものは藁をも掴む」心境で『総合的な学習の時間』(仮称)』に関心を示さざるを得ない。「腐った干物の寝言」に基づいて教育課程の改善が進められることが我が国の特徴なのか、教育に係わる文書一般はこういうものなのか不明であるが、いずれにしてもより深刻なこの議論は当面棚上げすることになる。

3. 『「総合的な学習の時間」(仮称)』について

中間まとめにおいて『「総合的な学習の時間」(仮称)』は第1章：教育課程の基準の改善の基本方向、第2節：各学校段階を通じる教育課程の編成及び授業時数等の枠組み、の第(2)項：「総合的な学習の時間」(仮称)に登場する(教育課程審議会1988, 122-123頁)。さすが「腐った干物の寝言」と揶揄したくなるだけあって重複が多く、何が決定的に重要な事項なのか解りにくい文書であるが、第(2)項及び文責者不詳(1998)の資料に基づいて、修飾語や重複を整理し『「総合的な学習の時間」(仮称)』のポイントを以下に箇条書きに要約してみた。どの程度要約したか解るように1例として、第(2)項：「総合的な学習の時間」(仮称)中の項目「ア」の前半の原文を下に示す。

『「総合的な学習の時間」(仮称)のねらいについては、各学校の創意工夫の下で行われ

る横断的・総合的な学習を通じて、自ら課題を見つけ、よりよく課題を解決する資質や能力の育成を重視し、自らの興味・関心に基づき、ゆとりを持って課題解決や探求活動に主体的、創造的に取り組む態度の育成を図ることとする。』

なお、この文を要約した結果は、下記要約の1. [目的]の②になる。

『「総合的な学習の時間」(仮称)』の要約

1. [目的]

- ①社会の変化への主体的対応能力の育成。
- ②問題解決に創造的に取り組む態度の育成。
- ③知識や技能(情報の集め方など)を総合化することの修得。

2. [学習内容]

- ①例；国際理解・外国語会話、情報、環境、福祉。
- ②実体験、観察・実験、調査、体験的学習の重視。

3. [学習活動]

- ①集中的学習、グループ学習、異年齢集団による学習等多様な学習形態。
- ②複数教科の協力。
- ③校外の教材・学習環境の活用。

4. [教育課程上の位置づけ]

- ①小学校；教科以外の教育活動、第3学年以上。
- ②中学校；教科以外の教育活動、全学年。
- ③高等学校；教科、学年指定は行わない。

5. [授業時数]

- ①小・中学校；各学年年間70単位時間(週あたり2単位時間)以上。
- ②高等学校；検討中。

6. [評価]

- ①小・中学校；活動状況・参加意欲を評価。
- ②高等学校；絶対評価。

先に示した例からも解るように原文は修飾語過剰なので、ここに示した要約は厳密に言えばいずれも幾分かの不正確さを含まざるを得ない。正確な要約が困難な文書に基づいて

教育課程基準の改善の方向が、決められてしまうという本質的な問題を容認することを前提とした作業であったので、その点はやむを得まい。中間まとめは、作成者ないし文部省が『「総合的な学習の時間」(仮称)』は簡単に要約できる話ではない、と主張することができる文章構造になっており、文句がつけ難いという官僚の作文の条件の一部は満たしている。「腐っても鯛の干物の寝言」と評すべきであろう。

4. 『「総合的な学習の時間」(仮称)』への対応について

『「総合的な学習の時間」(仮称)』は、学校の自由な教育活動を前提としている。そして、児童生徒が社会の変化に主体的に対応できるような教育を、国際理解・外国語会話、情報、環境、福祉など1つの教科では対応できない問題を取り上げ、同時に情報の集め方、調べ方、まとめ方、報告や発表・討論の仕方などを修得させる、という提案である。当然のことながら、基礎知識の修得も実地の問題への応用を通じてなされることが前提である。このための授業時数は中学校を例にすると、3年間で210～335単位時間である。この時間数は『「総合的な学習の時間」(仮称)』が実現した時点の3年間の総時間数の7.1～10.7%となり、国語・数学・外国語・社会・理科に匹敵する分量である。小学校では第3学年以上が対象であるが、各学年とも年間総時間数の11%を越える。

『「総合的な学習の時間」(仮称)』は、従来型の教科学習では社会の変化への主体的な対応力を育成することは難しいということと考え出された(高階1998)ものである。したがって、これを実際に行うことは、従来教科ごとになされる授業のシステムに慣れきっている人には難しそうに見える。実際、教員養成セミナー3月号別冊に掲載されている「中間まとめ」に対する様々な立場の教育関係者の意見の中に、担当者の押しつけ合いが起こる危険性(三浦1998)、学校の現状から大きく離

れた提案で具体化には現場教師が後込みをするのではない(関根1998)などの指摘がある。難しいとすれば、その理由は『「総合的な学習の時間」(仮称)』の担当者が育成しなければならない実践技能が多様なことであろう。その最大の一つが野外調査の指導である。野外調査が『「総合的な学習の時間」(仮称)』において重視されるであろうことは、学習活動として校外の教材・学習環境の活用、教材例として環境あるいは体験学習の必要が上げられていることから、容易に推測される。

多様な実践技能に関して、大阪教育大の田中博之氏(1998a, b)は、『「総合的な学習の時間」(仮称)』において育てることが必要な3つの力(6つのスキル)を次のように整理している。すなわち、[知る力]①観察力・記録力・分析力、②調査研究能力、[創る力]③作品制作力、④メディアリテラシー、[表す力]⑤コミュニケーション能力、⑥総合表現力、である。これらすべてについて指導が必要ということになるが、複数教科の協力が前提なので一人の教員がすべてを担当するということでは必ずしもない。

しかしながら、[知る力]として上げられている2項目を、野外調査を通じて具体的に指導できるようになるまでには何らかの経験が必要である。野外調査において要求される[知る力]は、載籍調べ型の研究におけるそれとは同じではない。文献調査能力とは別に必要な能力であり、複数教科が分担すればできるという性質のものでもない。このスキルの修得は、現任教員と同時に教員を志望する大学生・大学院生にも課されていることになる。

しかるに、地理学教育においてはこの課題を果たすべき教育を以前から行っている。実地調査能力は、地理学教育において重視してきた「巡検」において、我々が学生に修得を要求してきた能力・実践技能である。「巡検」は、従前より地理学教育の特徴の一つであるが「巡り検ずる」という語感が古く、また「検

から調査を想起させることも容易ではなくなったので最近では「野外調査」、「フィールドワーク」ということが多くなった。

したがって地理学科またはそれを継承する学科の卒業生にとって『総合的な学習の時間』（仮称）』で要求される野外調査の実践技能はさほど驚くことではない。しかし、載籍調べというような調査の教育しか受けてこなかった学生にとって、野外調査の実践技能は思い浮かべることも難しかろう。地理学教育が『総合的な学習の時間』（仮称）』を契機に幾分かでも活性化しうるのであろうという希望の観測をする根拠はこの点にある。

5. おわりに

『総合的な学習の時間』（仮称）』が出てきた背景は、現在の我が国を支配しているすべての面における行き詰まり状況がある。この数十年我が国の教育の目標が、もっとも優秀な成績を修めた一群の人々を汚職官僚に育て上げることであった、あるいは汚職官僚を選抜することであった、といわれても止むを得ない状況が現在司直の手により解明されつつある。そればかりか、我が国の高級官僚と政治家に統治能力、長期的な展望能力が著しく欠けていた結果が今日の行き詰まりであろう。教育課程審議会（1998、122頁）が「社会の変化に主体的に対応できる資質や能力を育成することを考える」と言いたくなるのももっともなことである。

高級官僚達が入学試験等の各種試験を高い成績で通り抜けてきたことは間違いない。そこで、彼らが試験で優秀な成績を修めたことについて考えてみる。最も見事な例が国語の試験問題の文学作品の作者の心情等を問う形の設問である。試験問題としては一見もっともらしいが、その実問うているのは作者の執筆意図ではなく出題者の出題意図である。つまり出題者がその作品を読んでどう思ったかを回答させようということが試験問題として仕立て上げられているにすぎない。回答者は高得点を獲得するために、自分の運命に関す

る当面の最大の決定権者である出題者の意図を探りそれに従わなければならない。こんな技術は役人が上役の心情をうまくおもんばかることくらいにしか役に立たず、国民の立場でものごとを考えない役人を選抜する方法としては最適である。こう言いきる前提は、文学作品の執筆の動機を残らず書き尽くすことができた作家というのはほとんどあり得ないこと、逆にある作家の全作品を読んだとしても作家の考えのごく一部しか理解することしかできない、という自明の事実による。こういう試験問題によって汚職役人が選抜されてきたのである。

一方、世界に目を転じて、様相の違いはあるが行き詰まり状態はある。地球環境問題に象徴されるように、著しく専門化した分析がいくら精緻であっても、それを合成して地球環境の現状を再現するには不十分であることが世界的に共通の認識となりつつある。教科別の知識学習の限界ということの全地球化であり、Globalizationという言葉は至る所で使えるものである。これまでのような教育をいくら熱心にやっても世界は変えられない。と思っていたら、意外なところで似たような話をしているに出会ったので紹介する。

『（前略）日本のスポーツにおける練習の構成における考え方は、「基礎から応用へ」「初歩から発展」へと、いわゆる段階的なやり方が一般的だった。（中略）ボールゲームの展開は、次にどのような状況が起こるのか、筋書き通りにはならない。（中略）プレイヤーは、そうした場面場面に適切な判断と動作で対処しなければならない。（中略）ゲーム・ライク・プラクティスは、ゲームにおける多様な状況に対応する能力を第一に要求し、その中で様々なスキルを向上させようとするものです。（日本ラグビーフットボール協会強化推進本部、1998）』これは、日本ラグビーフットボール協会の勝田隆テクニカル・ディレクターが日本代表の平尾誠二監督との対談の形で、同協会の方針について語っている一部である。

ラグビーに不案内な読者のために背景を説明する。フットボールの1種であるラグビーは英国4地域(ただしラグビー界では国と同格の扱いを受ける)とフランスの北半球5カ国とニュージーランド、オーストラリア、南アフリカの南半球3カ国が世界のトップグループを形成し、日本はそれに続くグループの下位またはそれ以下というのが現状である。したがって、前記8カ国にはほとんど勝てる見込みはない。日本が8カ国のどこかに勝つとすれば、対戦時期の最弱チームが最悪のコンディションあって、さらにその上取りこぼしをすることが必要である。取りこぼしを期待することしかできない日本のラグビー界が、上位チームと対等に戦えるようになるための練習方法についてようやく考え始めたのが上述の話である。大差を縮めるには、基礎練習から積み上げていたのでは間に合わない、試合をイメージした練習(ゲーム・ライク・プラクティス)をしながらスキルも身につけていかなければならないということである。日本ラグビー界の前途は遠い。

我が国の教育に新たに導入されようとしている『「総合的な学習の時間」(仮称)』は、社会の変化に主体的に対応できる資質や能力を育成するためには教科の枠を超えた学習が必要であり、それらの育成を野外調査など現実社会に即した場面で行おうとしている。それは日本ラグビー界が強いられているゲーム・ライク・プラクティスのイメージにほぼ近い。また、地球環境問題への対応も基礎がすべて完成してからでは間に合わないので、環境の保全・破壊防止・復元という目標達成に結びつく可能性が少しでもあれば、その措置をとらざるを得ないが、これもゲーム・ライク・プラクティスなのかも知れない。

さて、地理学界は、複雑な地理的現象の解明に立ち向かうためには、大学・大学院の4ないし9年の地理学教育で基礎から積み上げているのでは間に合わないことは認識していた。間に合わない状況から逃れるには、1分野に特化して地理的現象の1つの側面のみに

こだわり最終的には地理学界から離脱するという方法があり、自然地理学諸分野は多くその途を採った。しかし現実の現象の複雑さから逃げることなく、正面からそれに立ち向かおうとすれば、まず現象を正確に認識することが必要である。したがって地理学教育は野外調査(巡検・フィールドワーク)、そしてその教育に集中することになる。その結果は、もし『「総合的な学習の時間」(仮称)』が発足したら、比較的抵抗無くそれを担当できる能力が身についた学生が養成できている。あるいは、地理学教育を受けた現役の教員は、『「総合的な学習の時間」(仮称)』において重要な役割を果たすであろう野外調査における[知る力](観察力・記録力・分析力、調査研究能力)を実践することが、少なくとも建前では直ちに可能であり、同時に本音と建前の落差も承知している。万全の準備を整えて実施する野外調査においても、その展開は次どのような状況が起こるのか筋書き通りにはならない。調査者は、そうした場面場面に適切な判断と動作で対処しなければならないのである。このことは『「総合的な学習の時間」(仮称)』で実際行われるであろう野外調査において、それが専門的な野外調査とはかけ離れたものであっても基本的に同じである。どのような場面においても、地理学教育の野外調査を経験したことがある現役の地理教員は他教科に比べると圧倒的なアドヴァンテージを持っている。

ただし他の分野もすぐこのことには気づくであろう。分布図を描くのが地理学、描けるのが地理学者とかいう台詞をいつている間に、今や誰でも分布図を描くようになったのと同じことが起こるのである。地理学教育が『「総合的な学習の時間」(仮称)』を契機に活性化するためには、今の瞬間にうまく立ち回ることが必要なのかも知れない。『「総合的な学習の時間」(仮称)』という舞台上で最もうまく立ち回らなければならないのは、地理学教育を受けた現役の地理教員であり、彼らが『「総合的な学習の時間」(仮称)』に関与でき

る範囲で地理学教育の意義を鮮明に示すことから地理学教育そして地理学が幾分かでも活性化する可能性が生じることを信じる。

文献

- 教育課程審議会（1998）：教育課程の基準の改善の基本方向について（中間まとめ）＜全文＞。教員養成セミナー3月号別冊，時事通信社，第20巻第9号，110-168。
- 佐高 信（インタビュー）（1998）：精緻になればなるほど教育は衰弱する。教員養成セミナー3月号別冊，時事通信社，第20巻第9号，23-27。
- 関根正明（1998）：中学校／学校の現場から。教員養成セミナー3月号別冊，時事通信社，第20巻第9号，36-38。
- 高階玲治（1998）：総合的な学習の時間／新たな認識が必要。教員養成セミナー3月号別冊，時事通信社，第20巻第9号，45-47。

田中博之（講演）（1998a）：総合的，横断的学習の進め方について。お茶の水女子大学附属 小中合同研究会，3月6日。

田中博之（1998b）：多様な実践技能を育てる総合的学習（連載／スキル育成を重視した総合的学習の構想①）。生活科と共に総合的学習を創る，明治図書出版，No. 86，61-63。

日本ラグビーフットボール協会強化推進本部（編著）（1998）：『楕円進化論』，ベースボール・マガジン社，238P。

文責者不詳（1998）：「総合的な学習の時間」（仮称）について（案）／文部省・教科審提出資料。教員養成セミナー3月号別冊，時事通信社，第20巻第9号，169-171。

三浦孝啓（インタビュー）（1998）：子供たちの変化に対応していない学校教育。教員養成セミナー3月号別冊，時事通信社，第20巻第9号，18-21。